

地域に根付く力を育む建築

-けんちくあそび鉄団 手作り基地プロジェクトの設計・企画・実施を通して-

21419005 板部 玲子
指導教員 宮 晶子 准教授

コミュニティ 子ども ワークショップ
帰属意識 ヤンキー 空間づくり

【研究の背景】

現代人は地域コミュニティの息苦しさに疲弊し、都市部で自身と地域を切り離して生活することを選んだが、そういった孤独な都市居住には精神的に無理があると気づいた。現在、良いコミュニティを作る方法が盛んに模索され、建築はそれに形を与える役割を担っている。

そこで私は「ヤンキー」と呼ばれる人々に着目した。地域に密着して生きるためにどのように地域に居場所を作っているのか、地域建築を使う人々のことをより深く知ることで、建築が地域性を獲得するためのヒントを得られるのではないかと考えたからである。

【ヤンキーについて】

「ヤンキー」は 1980 年代頃から不良少年の総称として用いられた言葉だが、特に地元つながりで集まった「暴走族」や「レディース」などの地元由来の集団やそれに所属する少年少女を指す。

地元の中学・高校の先輩や兄弟などの紹介で集団に入会し、決められた年齢になり「卒業する」まで勝手な脱退を禁ずる規則を持つ場合が多い。またヤンキー集団つながりで就職先を得たり、卒業した先輩が家庭を築く様子などを見て、具体的な将来のビジョンを持つことができる。このようにヤンキー文化には若者が地域社会にスムーズに溶け込むための人脈や目標、タイミングを作る通過儀礼としての側面があった。

ヤンキー的な人々は「生き様」を重視する。彼らの行動理念は「今」「ここ」を生き延びることであり、その基盤となるのが「ここ」つまり地元である。基盤である「今」と「ここ」が揺らぐことは許されない。だから愛するしかないのだ。こうして地元愛は形成される。

【ハンナ・アーレントとヤンキー】

ハンナ・アーレントは人間生活は労働・活動・仕事で構成されると述べた。労働により日々時計を回し、たまにハレのイベントとして祭りなど活動を行う。音楽、文学、芸術などは仕事として時間の流れから外れ後世まで

残る。ヤンキーたる人々は多くが労働に従事し、活動を好む。この時間の流れに乗るために早熟な志向を持ち、精神と身体のアンバランスを誇張するかのごとく、公共空間で目立って見せるのである。

建築は仕事に分類されるが、それは多くの人々の日々の労働のもとに成り立つ。

私は労働と活動の円の中で人々と共に回る建築を目指し、ヤンキー的な人々と建築を交わせることができないかと考えた。

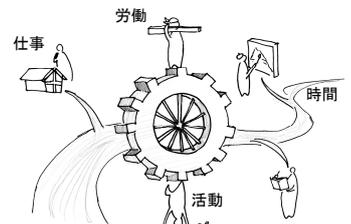


図2 労働・活動・仕事

【ヤンキーの造形】

ヤンキー文化は服装や乗り物の装飾などにおいて独特な美学に基づく造形を行い、独自の様相を呈する。その特徴として、社会の主流概念から外れた「逸脱文化」であること、それらのあらゆる逸脱文化から引用したシンボルをそれぞれの文脈と関係なく組み合わせた「異種混交」なものであること、集めたシンボルを自分たちなりに「カスタマイズ」すること、そして目立たせるために肥大化させたり光らせたりという「過剰表現」をすることが挙げられる。これらは一種のブリコラージュであり、技術と資金を持たざる人々にとって基本の制作法として全世界に見られる。

その中でも日本のヤンキー文化特有の特徴は「異化効果」である。あえて「ダサイ」ものをコーディネートに取り入れることで全体の印象をアンバランスにし、得体の知れない奇妙さと、一般的な感覚から外れた文化に属することを強調する手法である。

【研究の目的】

本研究では以上を踏まえて、地域に対して手をかける・地域の人々から手をかけられる、という関係性の中にヤンキー的コミュニケーションの可能性を見出し、この関係性の演出を試みる。地域に関わる人々、特に子どもに非日常的な場作りを通して地域に対して手をかける経験を提供するワークショップを実行する。地域、地域・まちづくり・建築への関心を引き出し、やがて彼らが「今ここ」を「カスタマイズ」して地域を住みこなせる人材となることを期待する。



図1 ヤンキーイメージ図

【設計内容】

どこでも手に入る材料で、出来るだけ簡素な加工で、子どもでも簡単に施工でき、解体や保管が容易で、繰り返し使える構造を持つ仕組みを設計した。

30mm×40mm の断面を持つ赤松垂木という木材を用いた三角形の枠を2つ組み合わせたものを基本単位として、それを複数並べて空間を構成する。

床はジョイントマットを用い、規格サイズでの展開を可能にした。枠の底辺もマットサイズの規格に合わせてながら、材の種類を少なく、入り込みたい大きさを考えて制作した。また枠に貼る布を選んでカスタマイズできるようにした。

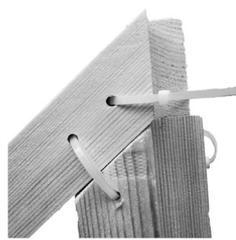


図3 接合部



図4 子どもが組み立てる様子

【敷地】

神奈川県横浜市青葉区鉄町は、横浜市北部を流れる鶴見川中流沿いの地区で、新しい住宅と古くからの邸宅が混在する。周辺の丘が高級住宅地化しているが、鉄町は市街化調整区域が多くを占めるため田園風景が残る路村である。公園はなく、子どもたちは農道で遊んでいる。



図5 鉄町敷地周辺

【ワークショップ概要】

午前10時から、くろがね青少年野外活動センターのスポーツ広場にて基地の枠組み作り。枠が出来たら鉄町内の敷地に移動させ設置。設置場所は地主さんに交渉して拝借した、住宅と田畑の境界にある駐車スペースである。

昼食を基地内で食べたのち、午後13時よりクリスマスオーナメントをつくる工作を基地内で行う。午後15時30分頃から解体。

表 ワークショップ概要

団体名	けんちくあそび鉄団 (くろがねだん)
イベント名	手作り基地プロジェクト
実施日	2017年12月23日
のべ参加者	学生5名 子ども6名 大人15名

【ワークショップ結果】

固定には結束バンドを使用したため、子どもたちも組み立てに参加でき、枠に貼る布選びも想定以上に楽しんで取り組んでもらえた。

床について、子どもたちは我先に自分の作った枠に床をはめようとした。その結果中央部分にマットが足りなくなったが、中央を動線として使うという想定外の用途も生まれた。

屋根は竹を結束バンドで枠に固定しただけであった。想定以上に不安定だったため、麻紐でそれぞれ連結して、園芸用の杭で引っ張ったが、やはり地面が杭打ちに適しておらず不安定なままであった。屋根に布をかけたかったという意見も出た。



図6 入りこみたい形



図7 実施時全体像

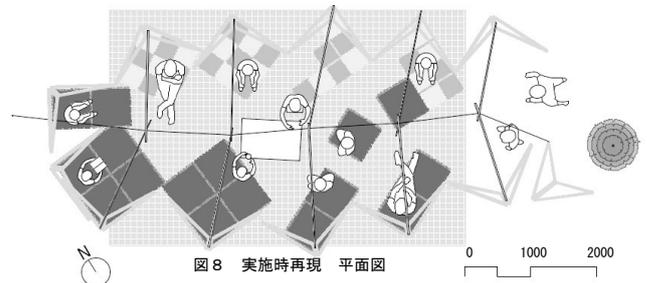


図8 実施時再現 平面図

【改善案・今後への展望】

屋根の不安定さと施工の不確立さ、屋根の密度の低さが問題となったため、竹に開ける穴を増やして屋根の架構を改良し、接合部を強固にする。屋根に布などをかけやすくなり、より多様な空間づくりが可能になる。

この資材を鉄神社で保管し、季節のイベントごとに設置・解体する。人々が作り方のレシピを共有することで修繕や加工が自力で行えるようにする。この三角形の構造がそれぞれの小さな地域性を纏い、多様に様式が更新されてゆく。この建築が、労働と活動の水車を人々と共に回しながら変化してゆくことを期待する。

【主要参考文献】

ハンナ・アーレント 著、志水速雄 訳『人間の条件』筑摩書房、1994年
 斎藤環 著『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』角川書店、2012年
 五十嵐太郎 編『ヤンキー文化論序説』河出書房新社、2009年
 丸山欣也 著『かたちの劇場』建築資料研究社、2010年
 伊藤孝紀 著『まちを演出する 仕掛けとしてのデザイン』鹿島出版会、2013年